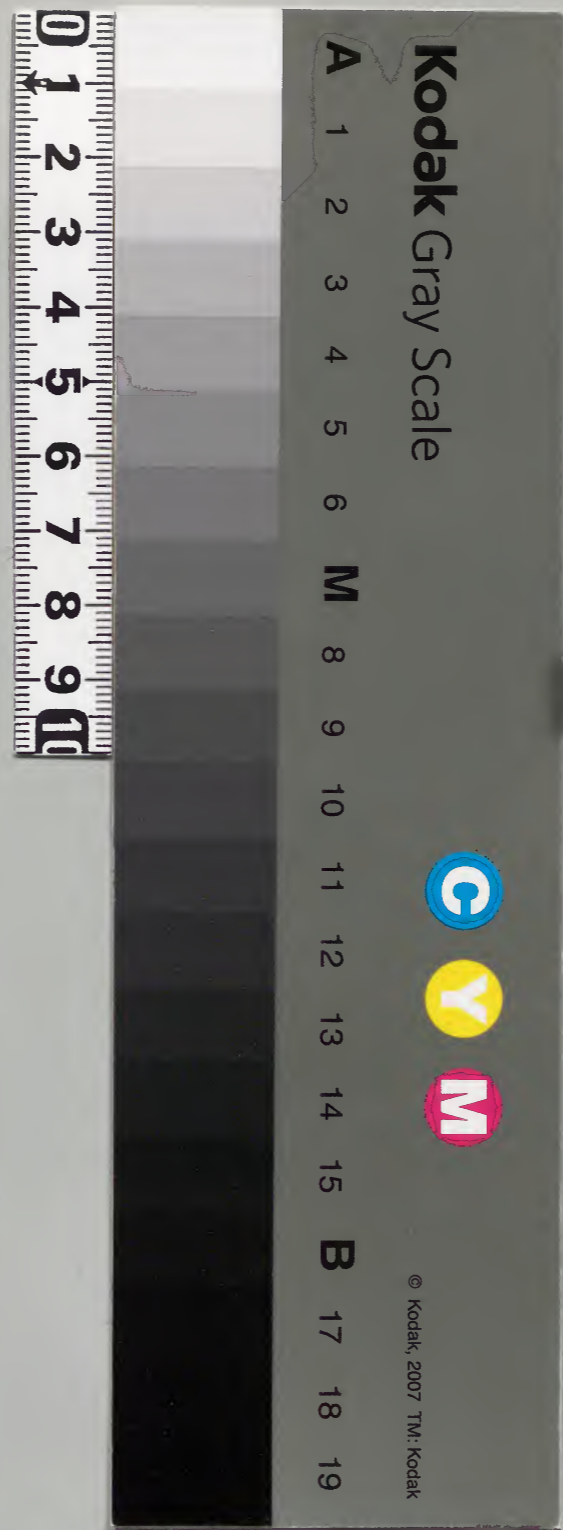
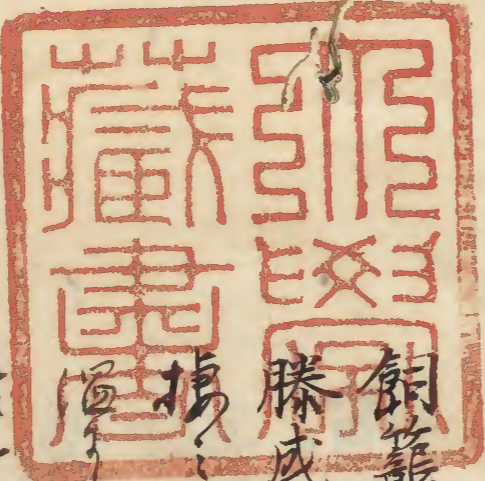


番外書冊

朝花為

庫文閣内		
一七	九七	和
内閣文庫		
番號	和 17542	
冊數	20 (17)	
函號	197	128





朝籠鳥 鷺鴨部 目錄第十七卷

藤成裕 日鷺や鴨や皆陰又屬して水又

陸より汚るときは潔きとほむる性

性と擅池沼の浮物と人の珍観は物を

是乃我々の書に右軍よりなる事通と廣

遠く傳へ鴨の宋の子贖つたる美 必と

猪人より示すに形容 頁より一節ある尾

終く是後く是乃水禽の天質全 具し

鳴りて美音多き性陰ありあり

鳴りて美音多き性陰ありあり



浅草文庫

一 鶯 鶯 經

二 鶯 鶯 禮

三 鶯 鶯 禮

四 鶯 鶯 禮

五 鶯 鶯 禮

六 鶯 鶯 禮

七 鶯 鶯 禮

八 鶯 鶯 禮

九 鶯 鶯 禮

十 鶯 鶯 禮

十一 鶯 鶯 禮

十二 鶯 鶯 禮

十三 鶯 鶯 禮

十四 鶯 鶯 禮

十五 鶯 鶯 禮

十六 鶯 鶯 禮

十七 鶯 鶯 禮

十八 鶯 鶯 禮

十九 鶯 鶯 禮

二十 鶯 鶯 禮

二十一 鶯 鶯 禮

廿二 鶯 鶯 禮

廿三 鶯 鶯 禮

廿四 鶯 鶯 禮

廿五 鶯 鶯 禮

廿六 鶯 鶯 禮

廿七 鶯 鶯 禮

廿八 鶯 鶯 禮

廿九 鶯 鶯 禮

三十 鶯 鶯 禮

三十一 鶯 鶯 禮

三十二 鶯 鶯 禮

三十三 鶯 鶯 禮

三十四 鶯 鶯 禮

三十五 鶯 鶯 禮

三十六 鶯 鶯 禮

飼籠鳥鶯鴨部目錄終

飼籠鳥卷之十七

鶯鴨部 六三 種

鶯

禽經

一名 右軍

南寧府志

長頸

事林廣記

義愛

事物異名

義禽

事物異名

草鴨

南寧府志

舒雁

本草綱目

家雁

同上

駝駝

事物異名

羽衣郎

各物法言

兀地

通雅

家居

御菜本草

羽衣道士

事物異名

和名才ホカリ

和産固らるる日本紀又確畧天皇の

内唐土より来りしと載りし人亦

入唐のハ乃チ和名と云て形似しく

異多しと来又希と唐舶載書
形色がくく不図りつ相多 家又楸
鷹顔と名付るい 上京よてを竹の総て
見らるるありしそれとも卯と海船の
束免て難く御しし進い乃彼の唐の
如くありしなりし之形状雁に似て大に
總て純白より改て 黄肉冠りし
嘴ももあし深黄あり又蒼色ありも
けりそを蒼鷺と云本報合體よく状
鴻雁の類と述世華より来りたり唐

雁と云其候北より上古より来りしと云
志し以葦の本更候候り形家鴨の如く
しと大あり脚長く水の中より頸長く喉の
切り黄色のふゆりし嘴脚も黄色ありと云
相法家鴨より相同し庭園に池に候り
是と書しあり卯と生るる雛より雛より
本草綱目曰時珍曰鷺鳴自ら呼江東謂之
舒雁似雁而舒緩也又曰江淮以南多畜
之有蒼白二色及大而垂胡者並綠眼黃
喙紅掌善闘其夜鳴應更又云鷺伏卵則

逆月謂向月取氣助卵也性能啖蛇及蚓
制射二故養之能辟虫虺或言鷲性不食
生虫者不然

師曠禽經曰脚近膝者能步

典籍便覽曰迫之俞前抑之俞仰故云頑
而傲無統の如人先之迫の俞前也

八閩通志曰鷲能驚盜亦却蛇蓋其糞能
殺蛇蜀人園池食鷲蛇即遠去

當塗縣志曰鷲尔雅曰舒雁有白蒼二色

鷲

一谷鴨說文 鷲通雅 舒鳧爾雅 沉鳧代瑯琊 白鳧事物異名

家鳧本草綱目 家鴨同上 煩鴨事物異名 鴉鳴雅廣 鶻瑯琊代 鶻瑯琊代

末匹通雅 綠頭事物異名 秃刺同上

綠衣郎名物方言 青頭雞三回志 青頭道士事物異名

番名上 丁テ

和名ア ヒル ア ヒロ耻口ト云意

此物カヒルト云白も赤も藥又用て候多し
食て候も眼疾
カモカヒルト云白も赤も藥又用て候多し
切多伏流の俗西蟻織の大澤の秘の池

多く群る所。其の一人、或は高きを翫る
釋名の鴨と古く誤てカモと訓む所あり乃チ
アヒルあり何法ハ科子と誤るなり又其菜と
好く食す大雅雞と曰く法相と食ふ事
彼者ハ秋の彼者カキ卵と生心保頭の卵を
食ふに信あり流水の清浄の所を生
た卵ハ土中あり且葉食ふ用あり
本草綱目曰時珍曰鷺通作木鷺性質木
而無他心故廢人以為鷺曲礼云廢人執
匹匹雙鷺也匹夫早木故廣雅謂鴨為鵝

鳴禽經云鴨鳴ハ呶呶其各自呼鳧能高飛
而鴨舒緩不能飛故曰舒鳧弘景曰鷺即
鴨有家鴨野鴨臧器曰尸子云野鴨為鳧
家鴨為鷺不能飛翔如廢人守耕稼而已
保昇曰爾雅云野鳧鷺而本草鷺肪乃家
鴨也宗奭曰據數說則鳧鷺皆鴨也王勃滕
王閣序云落霞與孤鷺齊飛則鷺為野鴨
明矣勃乃名儒必有所據時珍曰四家惟
臧器為是陶以鳧鷺混稱蓋以鷺為野鴨
韓引爾雅錯舒鳧為野鳧並誤矣今正之

蓋鷺有舒鳧之名而鳧有野鷺之稱故王
勃可以通用而其義自明案周禮庖人執
鷺豈野鴨乎因風弋鳧與鴈豈豕鴨乎屈
原離騷云寔與騏驥字將與鷄鷺爭食
邦寧昂昂若千里駒字將汎汎若水中之
鳧字此以鳧鷺對言則豕也野也益自明
矣又時珍曰案格物論云鴨雄者綠頭文
翅雌者黃斑色俱有純黑純白者又有白
而烏骨者菜食更佳鴨皆雄瘖雌鳴重陽
后乃肥膸味美清明后生卵則內陷不滿

伏卵聞齧磨之聲則礙而不成無雌抱伏
則以牛屎壅而出之此皆物理之不可曉
者也琉球の醫師 壽屋武筑登之福列
の琉球館又行て医術と學ふル地筑登
之鴨と依て雛をあたふ法と傳へ來り
薩列の嶋津壺殿の命又依て鴨卵と
三百箇と集て蒸器の中又蒸く火氣と
以て蒸て雛とあたふ薩列の法と傳へ
法と地筑登之より傳へたる也
そ卵多く腐れし雛とあたふ事

少一々何の意か一箱登るべく唐
の魚肆は皆雜鴨の多し一箱高く
一も夢の如く皆能く雜鴨の多し云
主法は卵と大よみて少一梧して予
卵のよ汗とがしわと并汗と拭きて
馬糞の肉を並て裁きも亦や大丸
と入て常は喰ひてはしるは
の自ら雜鴨の雜鴨の食は自ら食

揚州府志曰鴨鴨伏以牛矢糞而出焉
此説のよ牛の糞と共て糞とるは付
乃馬糞の也

嶺南雜記曰雄鴨以南雄府得名鴨獺而
肥醜而以麻油漬之日久肉紅味鮮廣城
甚貴之

物類相感志曰鴨蛋以硃砂畫花及寫字
候乾以頭髮灰汁洗之則黃直透内
清人云く雲南の麗水にすその人云
く皆鴨を多く飼ひて日く水中に

三

へて急堀と有食しむる養中又金河
淘りて金と有るをと鴨沙金と云へり

黒嘴白鴨 雷公薬性解 一名鳳 鉛山縣志

和名ハシク口

先年琉球より渡来し来りて形状今
常の鴨より純白只嘴と爪と眞黒あり
雷公薬性解曰黒嘴白鴨と云いそれあり
又純黒より嘴と爪と黄ありよりそれ
ありと云ふあり

本草綱目曰時珍引格物論曰又有白而

烏骨者薬用更佳 是の色ありと云ふあり

杭州府志曰亦有純白純黒者

鉛山縣志曰鴨有浙來者白身而黒骨者

曰鳳今失種し是を烏骨と云い昔凡の馬を

云そと又一名鳳と云と云くた

當塗縣志曰鴨亦雅曰舒鳧廣雅作鴨匹

間者白毛黒肉者已上以種三種俱家畜

蒼白の二種より此黒骨あり三種あり彼の

より此三種より此より此種あり

た

四 大鴨 オオカモ

元来阿蒙院人持ある之形状亦同
一々毛色考の鴨の如く只大あると云
号ししるの如く同法和ある同し

五 譜厄利亚 イギリス 一名大鴨同

元来譜厄利亚の種ありしと云考の鴨と冠
頭鴨と更合しと雖と云したるもの
之形状冠頭鴨と亦似て而も鴨より
それハ和産の如くありそれ乃鴨中の
一あり

六 立鴨 タチカモ

一名ツク井エドト番 信濃 ビンダ 大津

阿蒙院の種ありしと云ありしと云候と云所
之大サ鴨より少く小くしと云はし
形色ハ相同しと云胸と注し尖むる鴨

七 冠頭鴨 クラントウカモ 一名バリテン 蓋一番

本末番産ありし之形状鴨と亦同し
あり大よ毛色也し亦似て只頭と云肉冠
一ハ鴨冠に似て高し見若しと云あり
之毛色も多し黒白亦雜しモノあり

カモアヒルあり、此鴉と對し、家鴉家鴨の二
 種の野鴉とて、鴉あり、野鴉ハカモあり、
 鳥鴉の字乃ニ種と連テ、形中相似りあり、
 尸子曰野鴨為鳥家鴨為鴉、此後皆此
 野鴉ハ鳥ニシテ、乃ニ鴉あり、家鴨ハ鴉
 之、似乃ニ鴉あり、其混雜止る、と云、皆誤を
 千古傳ふる事、此後と云、似り、其誤と
 傳ふる事あり、是れ又地境ニ此種と表は
 卯とあり、名あり、三年より、此大ニ富
 雜鴉より、鳥の傳ふる事と云

九

鴛鴦

古今注

一名匹鳥

同上

黄鴨

本草綱目

文禽

禮儀詳註

珍禽

事物異名

昂魚兒

同上

節木鳥

雅通

婆羅伽鄰提

涅槃經

番名

和名マシトリマシカモ

享保十一年八月十九日、台余を以テ、南京の
 鑿師周岐來、又此鳥と云、此岐來、云く、即チ
 鴛鴦也、一名黄鴨、匹鳥、共ニ本草綱目ニ
 あり、云く、此鴉、傳ふる事、古人の鴛鴦
 とあり、是れ、傳ふる事、古歌あり、云く、
 上毛の霜と拂ふる、此の鳥の影、乃

徳美にうくまのれい乃チ馨香の節
叶う世の古翁松年一後編よまを
法向たる池澤の問は澄澄とそ新柳
新^{アサヒ}柳^{シラカネ}の似やかー小う首よ長毛の
後又垂る眼色の已^{トモエ}息く似やむ白
背は黄緑色うう又彩相問て西翼の
葉色の洲りうてるる紫黄の
雌は美毛あり鳥の雌と同一三日の
樹木の洞の中より卵と生む卵と生む
雛くゆきゆの時ハ雛くあやうと種を
樹

よ美毛と生く美色とあれ凡の和鳥の
中美鳥のあはれ鳥なりゆりゆりゆり
雀の水とけり春の鳥一と向法の
法の鳥のうう時ハ^{スリ}雀^エとあやうむむ
灰色とあうて光沢と増や久く細い
卵の卵と産む雛鴨の類のう
本草綱目曰藏書曰人家宜畜之形小如
鴨毛有五采首有纓尾有毛如船舵形
其尻令くマシトリあり首は櫻の尾は船
舵形のおりるハ所謂想^{オモイハ}鴨ありそれ馨香

つるりと云ふは、
其を漢書に云ふに
實に誤り

又時珍曰、鴛鴦終日並游、有_下死在水中央
之意也。世故、それなりたるものなり。

古今注曰、鴛鴦雄雌不相離、人獲其一、則
一相思而死、故謂之匹鳥。予嘗て、

東都の某侯の庭池の中、雌雄と畜ふ、或
時拘の爲、之雌とあふ、只雄拘、浮遊に

救ひ、之を雌に奉る、それとあふ、相親む
云々、餘日、之を雌に帯て、呼ぶ、其に、

其雌思ふ、死を乞ふ、之を牛、うて去る
之、倍再、來るる、之、乞ふ、之、之れ、

古人の語、之、之、考考、之、之、

之、之、之、之、之、之、之、之、

一雄、之、之、之、之、之、之、之、之、

廿六日、之、之、之、之、之、之、之、之、

之、之、之、之、之、之、之、之、

のりあり幾百年も今も此地に
ありしとあり相あり是れ等のはたと
それい各鳥ありしなり
雙槐歲抄曰漁人見鴛鴦交飛獲其雄烹
之雌戀々飛鳴竟投沸湯中而死漢人悲
其意為奇美不食余稱之曰烈鴛也
況も記考考ふべしなり
古今注に取思而死と云も是なり
玉篇曰匹鳥雄曰鴛雌曰鴦也後と云
公考考ふべしなり

本草綱目曰時珍曰鴛鴦鳥類也南方湖
溪中有之棲干土穴中大如小鸭其質杏
黃色有文采紅頭翠鬣黑翅黑尾紅掌頭
有白長毛垂之至尾交頸而卧其交不再
陽春縣志曰鴛鴦水鳥紅頭翅尾黑頭有
白毛質杏黃色具文采一名匹鳥止則偶
飛則隻案に只雌雄共な浮遊し群集あり
禮儀詳註曰鴛鴦曰文禽又鶼雉も此名なり
杜甫花鴨詩曰花鴨無泥滓指前每緩行
此鴨も鴛鴦と指して云あり

鷓鴣

本草

一名溪鴨

異物志

鷓鴣

文説

紫鷓鴣

本草

和名イワナシ

諸州共々山間溪水中又雌雄相遊
 之類心合々鷓鴣考之似々背之の色
 緑紫あり鷓鴣考之むしりあり
 三甲内々樹元の中又葉と為るる鷓
 考之同々世人希々之を烟々鷓鴣
 考之貴一烟法もある鷓鴣考之古同
 本草綱目曰時珍曰杜臺卿賦云鷓鴣尋

類而逐害此鳥專食短狐乃溪中勅下逐害
 物者其游干溪也左雄右雌群伍不乱似下
 有式度者故説又又作鷓鴣其形大干鷓
 鴣而色多紫亦好並遊故謂之紫鷓鴣也
 後世相分ナリ一々鷓鴣一名鷓鴣と云々
 内々鷓鴣一々鷓鴣一々鷓鴣一々鷓鴣
 又長崎一々鷓鴣一々鷓鴣一々鷓鴣

の華もあつたこととて鶯鶯も能くお似て
飛ぶことと云ふより固く法外なき疑ひなしハ
鶯鶯も鶯鶯の志なきこととて彼の地よても
今の混雑して鶯鶯と云ふは予嘗て明細
の一古画と云ふに鶯鶯の事なしと云ふ
よしと云ふことなり乃鶯鶯オカカモと相似し
そ鶯鶯の志なきこととて彼の地よても
所々志なきことと云ふは法外給ふ今
考へると古名鶯鶯の事なきこととて
宋明の比より鶯鶯の志なきことと云ふ

あつたことと鶯鶯もあつたことと云ふ

説文曰鶯鶯水鳥也光有五色

建列圖經曰溪游雄者左雌者右皆有式度

十一
白鶯鶯 一名シロサシ

法外なきことと鶯鶯の志なきことと云ふ
小あつたことと鶯鶯の志なきことと云ふ

十二
釋明鳥 嶺表 一名

和名

和名は嶺南の山に鶯鶯の志なきこと
と云ふは鶯鶯の志なきことと云ふ

今の鳥あるや今の鷗あるや 雉あるや
上古の鳥あるものもよくいふ所の力もよくあるか
と云て佳あり

法あるはよき洲あり 秋あり 冬あり 春あり 夏あり
深淵に夏あり 冬あり 樹下の陰あり
御中へ付く水と暑く水に入るとあり 寒暑あり
又よきは性温熱あり あり 凡鳥の類皆あり
其形状 鴨 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒
そは ^{アサキ} 蒼首の鳥あり 雌の鳥あり 雄の鳥あり 斑
いろして 優く又 彩 斑 色 あり 鳥の類 甚く 甚

雛 ^{アサキ} あり 雨 長 之 南 郊 の 山 澤 之 雛
とあり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり
とあり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり
をあり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり
雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり 雛 あり
考工記曰 鳥入水不溺 ^{アサキ}
本草綱目曰 或云 食用 緑頭者 為上 其後
と云れ 彼の鳥あり 緑頭と云ふと云ふ
たつん 鳥の 味よく 飲する 世に あり あり

呼白鶴シ葉々ニ緹頭ニ比シとモ連シ腹下白一
形ノ白ク云ハ有ル也一

本草綱目曰尾尖者次之ハ無ク後方見ル也一

十五

尾長ハ緑頭ノ味ク少ク有ル

真與志ニ一名葦鴨コシカモ胡麻コシカモ作ル

北海ノ多ク又ハ西土ニもハ有ル其ノ形ハ脚尾長ク
似テ鴨ノ毛色胡麻ノ色多本草綱目ハ濫ニ
云ク葦鴨ハ頭背深灰色也腹淡白也
翅間青羽と云脚ハ黃赤と云味稍好也

十六

陸與志カカヨシ

北海ノ多ク其ノ形ハ真與志ノ似テ鴨ニ
鷹ノ斑ハ頭背青也美毛ハ有也一
真與志ノ者多希ニ也一其ノ人多

十七

赤頭アカカシラ一名ヒカモ

法ハ其ノ形ハ一羽中ニ希ニ也一
其ノ形ハ真與志ノ相同也一其ノ首ハ長ク眉ハ長ク
其ノ色赤腹白切細在腹下也其ノ味好
俗ニ雛鳥と云其ノ類ハ漢書ノ條ハ有也一

ふと一線尾色細く緑眼なり
おきて西照高く腰白く嘴黒脚赤
能くおぼしき数百群とるく
あふ幸鴨と云ふは眼白赤
世人語り花鴨ハナカモと云ふは
鳥の類の新平と云ふは
お同し

二十
冠鳥揚州存志 一名

和名ス、カモ花鴨柳川方言

九州柳川の沖にある他は他へ

先年陽川の海より来るは口鴨あり
そ大サ真鴨に似て胸カハ色は白黒相雜て
口鴨の如く嘴と鼻のよま赤冠
けとく海中一種冠鳥先と云ふカモと云ふ鳥
の中は一種冠鳥のりりり灰色と云ふ
との斑りりり毛長くわたくし又正
字通りハ冠作冠物付ハカモのりりり
冠ハ物の数多く集りて一統ハカモ
カモハ多ク集りて一統ハカモ

之所多也、其れも亦、世所の海、
中、又、栖、む、る、柳、河、の、海、に、居、る、て
居、る、付、い、そ、右、首、尾、の、化、々、不、の、如、し
華、夷、鳥、獸、考、曰、冠、鳧、言、方、曰、齊、米、之、間、凡
物、盛、多、謂、之、冠、注、云、今、江、東、有、小、鳧、其、多
無、數、俗、謂、冠、鳧、陸、龜、蒙、集、有、禽、暴、一、篇、
此、後、と、云、れ、い、そ、多、く、群、る、鳧、と、謂、く、冠、鳧、
と、云、ら、る、と、云、く、た、り、あ、る、れ、も、俗、説、候、に、記、し
揚、州、府、志、曰、鳧、一、種、冠、鳧、頭、上、有、冠、此、後
海、中、と、一、種、と、分、て、云、又、鴈、と、云、冠、河、と、云、

典籍便覽曰鶴頂鳥形大如鴨毛黑色頸
嘴亦長其腦蓋骨厚寸餘外紅色裏如黃
蠟

物理小識曰鶴頂乃海中鶴魚之首摩仰
其兩頰之紅子其頂骨也

華夷珍玩考曰鶴頂紅出南蕃大海中有
魚頂中鮎紅如血名曰鶴魚故以為帶號
曰鶴頂紅今用龜筒夾鶴魚鮎為梳名曰
鶴頂梳佐近在都御史羅通官舍見其鶴
頂紅帶云是海外真鶴頂剪碎紅夾打成

帶上有細波紋無紋者即偽物也又見真
 鶴頂但兩頰紅頂不紅者三不可作「帶」
 是等之法從とそれい海中の急首の骨
 あり此急乃石首急と云るは此の急首も
 あり薩列の急首紅と云る寸細の片
 石より兩端尖りたるの胭脂の急首也
 急首の物あり急首も急首也再急首也
 急の號骨あり冠急の急中も此の骨
 あり急の急首急の急中も此の骨
 あり此の急首と引て後考は偽也

廿一
 鳥 鷓亦雅 一名鴝鳥上同 鷓亦同

和名見吉鳥坂大
 何國よりあつてもあると詳は詳は
 大坂の毒鳥ヤありありと大々緑頭アツクなり
 黒白相雜る腹白面の頬より眼危
 の中より地帯と云ふこと観玩する
 何法冠鳥より同く急首の急首也
 貴鳥を過して急首の急首と云ふ
 急首

尔雅釋鳥曰鴝鳥鷓註水鳥也似鴝而

短頸腹翅紫白背上緑色江東呼鳥鶉

今使そんあ

廿二
黒鳥

法めなる荒海へあつたま大サ真鴨よ

總め海鳥あつたまもあつた佳あつた

冠鳥と白く大海の鳥よ

ふそ来方るる

あつた

廿三
間鳥 一名間早江

法めなるる

早鳥と稱して書つたそれあつた

以て来鳥の稱して白鷗の稱して

之般緑羽と似て着の色を

く家鴨の

つた

海中の種あつた

種と雖も

活るる

一種雀の

一種雀の

一種小丸〜〜備馬子〜
 一種大丸〜〜備の赤馬子〜
 一種小丸〜〜をいふ丸〜
 一種小丸〜〜をいふ丸〜
 已上皆海産して生えと食ふは皆海産也
 伊勢新海中に於て多く見らるるは
 とも一ツ二ツの辨明を〜
 人の能く去らばる物を供し載らるる
 又之を名號も混雜〜
 故に異〜載らるるは〜
 此類皆後編に

廿四
紫廣

辨明は且又圖中より細覽を
 法ありは〜大サ真鴨〜小丸の
 間〜丸の圓〜肩白腹も白
 背深黒紫の清藍色足は黒〜首は
 徒存句〜

廿五
金黒

法ありは〜主形状皆廣野〜
 只首〜徒存句〜太和本草〜
 真鳧〜改〜勝〜改の両條〜

黒光の毛背と黒し翅の黒白し翅
の先は白く腹は白く腹は細く
尾は長く帯は細く雁の如くは淡色
水は凡そ一と云々此説の如くは
人をも細く又春鳥家にもある
烟は鳧の如くは白く是等の類は皆
冬鳥を作して夏鳥の如くは池と作
清水と入て細くは久しと死す
るあり種類も多し集るあり
今そと集る人あり

或人云く先年春鳥家并の如くは種々
白日空の中を雷鳴あり人書く仰るは鳧
雁の如く空の中を飛ぶ教り皆首細と打て
形ありし中中金黒羽白をも多しと云
平仲談苑曰魏州朱陽鎮一夕鳧雁之聲
滿空其鳴甚悲建且鳧雁死于野中無數
或斷頭或折翅或全無所傷而血汚其喙
村民載之入市市人不敢買蓋此鎮未嘗
有此物怪之也此後能く嘗て空の中に
於て雷火を撃て双鳥を折る或は血を吐く

廿六

文鴨子 金楼 一名海鴨上同

和名ナキハシロ 沖羽白間羽白

北海より来る他ありあつるものとある國
ぞと新帳今く羽白と似てがく小
背より白く帯付の黒白相映して
帯の鳧の類と異つて体色の眞鳧と
相類とある羽より人よりものと云は
金楼子曰海鴨大如常鴨一斑白文亦謂之
文鴨一海況それあり海鴨海に栖む
の徳とあり此又鴨の名号よりいへ

廿七

柿羽白カキハシロ

法ありあつる羽より相似て腹より柿色の
所あり

廿八

點羽白ホシハシロ 一名ボツチハシロ

法ありあつる柿羽より似てがく大
肩より徳と異く腹白

廿九

籠籠羽白カゴハシロ

諸ありあつる羽よりがく小と淡
黒あり胸背より柿色あり肩より首より
赤ありのや

三十一
嶋蘆

北海の地方より多しある 秋早く来るもの
之類小鳥りしく腹は腹の斑りり背は背
色りり羽の色の色い下は柔なりん小鳥の中
解ふ鳥に相ひそなり又希は解ふ人
りり解法法の鳥は同し只多は解ふ人
解ふ鳥

世一
翡翠鳥

法は去りある下はサ小鳥のやう眼色清
藍色よりして羽の先は黒く好く梅りりて

世二

沖鳥 オキカモ
一谷沖玄鳥 オキノケンラウ奥川 方言

鳥列よりある下はサ小鳥のやう総は浅
藍色あり杖挿しえツエ箱と共くて釋
みけりありん 解鳥のやうてむも小
しきえりる鳥の鳥あり 解法冠
鳥のやう解ふ鳥り 鳥中より解て鳥

而盛每羣飛而過其數千萬捕者以細取之俗呼野鴨種類不一最小者名粒頭肉香而骨脆此說甚矣以白鳥之類也亦有秋深之時多干系此太湖の中は捕く土人業として網を捕ると云くは此等の説と云くはこれの湖邊の歌に日本と同極多の書籍と讀むる人へ是等の事と云くは空あり世を設けあり海あり如比の事と考て其地を知らず付い暗く彼の地の産と知ゆる微く思ひ

小鳥と云くは或い云くは南方の地は多量に能く野鴨多し且水鴨雁も亦多し是は漢を捕くて是と云くは其折を折たるもの多し北方の國はゆきありふらひ此の地の溪流の間は捕し又秋分の比よりたゞ

世四 鷓鴣

鷓鴣 正字 一名須羸 爾雅 水鷓鴣 日用本草 油鷓 本草綱目

鷓鴣 通 鷓鴣 正字

和名ニホトリ 古今集 カイツブリ 開ツブリマ備言 ナツテヤウツブケ 阿ノホ上 ニホ崎 イケツリ佐イヨノ上

メウナニ^武ムクリテウ^武テウテウムクッテウ^武カハキ^金ニッ^三ハ
メウナイ^信ヒヤウタシ^河カハキ^仙ニッ^三ハ^勢

和書は鳩の字とニホと名白石云くニホハ
湖と云湖中は物と云く此名と湖鳥と
云古今集は冬此池はすじは日と此
池れはくく廣まかり人よきしは
此歌よりニホの字ありしは鳥の字
も信よりし水よ入るの我と云てあり
法別はく池澤の中は生と云所は
何より大サカ鴨と似て都て野鴨の雛

と相似て是よ水ありて忽ち水よ
出没と人と云く是を鴨と云て
あよ入る遠く水と云く首と云く
四五月、菰葉と云く卵と生じ雛
く解く水と水と云く鳴くそを捕く
湖よるあつた水底の小池と云く
春よあつた湖の川と云く湖の川と云く
云く鶴鴨と似て小口鴨と云く
顔背翅尾蒼く赤と帯鰻也と似
く顔及頰下頸赤紫と胸黄と云く

紫斑の腹白嘴黒く能く紅赤
 好く浮遊し水に波に或は相対
 相伴て旋廻し味臊しく佳しく以
 本草綱目曰時珍曰鷺刀零丁皆狀其小
 也油言其肥也藏器曰鷺鷥水鳥也大如
 鷓鴣脚連尾不能陸行常在水中人至則
 沉或擊之便起其膏塗刀劍不鏽續英華
 詩云馬御首蒿葉劍瑩鷺鷥膏是也時珍
 曰南方湖溪多有之似野鴨而小蒼白文
 多脂味美冬月取之其類甚多

世五

鷺鷥

楊氏 一名

正字通曰鷺鷥蒼白文多脂脚連尾不能
 陸行一名水鷺又名鷓鴣俗作鷓鷥書多
 飲膳正要又水札河國とるるに鷺鷥

和名ナミクシ

法別名は海江の間は栖し乃チ鷺鷥の一種
 大向く相りしと大サ鷺鷥のしと形今チ鷺
 鷥に似て黒色と黄赤色と帯し尾短
 是を水鳥と云ふ乃チ鷺鷥に似て水
 波し人とりて乃チ鷺鷥に似て水鳥

積て卵と生と風と及てて生葉浮移る
小魚を食ふ所又解るると名をいふ

揚雄方言曰野鳧其小而好水中者謂之

鵞鵝大者謂之鵞鵝此説より大小合

^世海雀スズメ 本和一名カイヅムリ有之

南海の中に浮遊して乃チ海鳥といふ鵞鵝

の一種ありて其サ鵞の如く背と尻色あり

波浪と合て海水に浮して小魚と及食ふ

先と同る法あり此和事並にそく

鵞一回より多し鵞鵝は似し異る

カサハカ 鵞の如し海鳥あり昔尖て若の如し

及び背淡黒色胃腹白く胃腹の

回旁の毛黒白相雜り雲子より比

それより多し小魚を食ふ

其趾三つよりこれ水の足なり

多し不埒なる饌具婦人の血の道の

薬ありしと云ふ然るに此は

鵞水中に栖し鳥の脂多し鵞鵝及

此鳥の脂を多し古より刀剣に用ひ

けい聾は俗に此脂より三年磨

御別名割ハ切ハ切ハ切ハ切ハ此況
 七多ハ本ハ系ハよりハ切ハ切ハ切ハ切ハ
 續英華詩曰馬ハ啣ハ首ハ菡ハ葉ハ劍ハ瑩ハ（ハ鶴ハ鴈ハ膏ハ）
 國朝詩別裁集曰日本ハ雙ハ刀ハ歌ハ曰ハ鶴ハ鴈ハ之ハ
 膏ハ雙ハ于ハ將ハ燈ハ下ハ拂ハ拭ハ生ハ神ハ光ハ皆ハ此ハ膏ハをハ
 移ハりハしハるハ也ハ

詞籠鳥卷之十七終



